

2009年3月4日

主催 (財) ミズノスポーツ振興会

(財) ミズノ国際スポーツ交流財団

「2008年度 ミズノ スポーツライター賞」受賞者決定

(財) ミズノスポーツ振興会及び (財) ミズノ国際スポーツ交流財団では、'90年度より「ミズノ スポーツライター賞」を制定し、スポーツに関する報道・評論およびノンフィクション等を対象として、優秀な作品とその著者を顕彰しています。

3月4日、グランドプリンスホテル高輪で2008年度選考委員会を開き、受賞作品および受賞者を以下の通り決定いたしました。

なお、この「ミズノ スポーツライター賞」の表彰式を4月21日にグランドプリンスホテル新高輪で行います。

【ミズノ スポーツライター賞 最優秀賞】 (トロフィー、副賞100万円)

- ・「ケニア! ~彼らはなぜ速いのか~」 忠鉢 信一 (文藝春秋)

【ミズノ スポーツライター賞 優秀賞】 (トロフィー、副賞各50万円)

- ・「吉田沙保里 ~119連勝の方程式~」 布施 鋼治 (新潮社)
- ・「デットマール・クラマー ~日本サッカー改革論~」 中条 一雄
(ベースボール・マガジン社)

詳細は別記の通りです。

(お問合せ先)

(財) ミズノスポーツ振興会 事務局 内橋	TEL: 03 (3233) 7009
ミズノ東京広報課 澤井・木水	TEL: 03 (3233) 7037
ミズノ大阪広報課 高橋・大澤	TEL: 06 (6614) 8373

記

名 称：2008年度 ミズノ スポーツライター賞

制 定 目 的：スポーツに関する優秀な作品とその著者（個人またはグループ）を顕彰して
スポーツ文化の発展とスポーツ界の飛躍を期待するとともに、これからの
若手スポーツライターの励みになる事を願い制定

選 考 対 象：主として新聞・雑誌・単行本などを通じて書かれたスポーツ分野の報道・評論・
ノンフィクション等で、当該年度に発表されたもの

選 考 委 員：委員長 岡崎 満義 氏（元株文藝春秋取締役、「Number」初代編集長）

委 員 杉山 茂 氏（スポーツプロデューサー、元NHK報道センター長）

〃 村上 龍 氏（作家）

〃 ヨーコ ゼッターランド氏（スポーツキャスター）

〃 水野 正人 氏（(財)ミズノスポーツ振興会会長、ミズノ(株)会長）

※順不同

対 象 者：日本人および日本在住の外国人

受賞者及び選考理由：

- 「ケニア！ ～彼らはなぜ速いのか～」

忠鉢 信一（文藝春秋）

（ちゅうばち・しんいち）

陸上競技で中長距離界を席卷するケニアの選手。彼らの強さには何か科学的に証明できる根拠があるのか。世界中でその「謎」に興味を持ち、研究を続ける学者は数多い。

朝日新聞のロンドン駐在員で市民マラソンランナーである忠鉢記者は、雑誌“ランナーズ・ワールド”に紹介されたグラスゴーのビツィラディス博士の新学説「ケニアのランナーはレース前に減量し、水分補給も少なく、身体を軽く保っていることが速さの理由」に惹かれ取材に訪れる。

着想から取材、さらに展開と力強いストーリー構築で面白く読んだ。世界遺産を訪ねるネイチャー・ドキュメンタリーのように、サイエンスに重きを置いたトラベル・サスペンスのようでもある。局面が次々と展開してゆく構成は、多分にベストセラー小説である「ダヴィンチ・コード」の影響を受けているような印象を持ったが、だからと言ってそこに嫌みは感じない。新鮮である。文体は歯切れがよく、短い文章を畳みかけるように積み上げてリズム感がある。所々に挿入されている会話も生き生きとして、リアリティを演出している。

本書を通じ、数多くの真剣な研究がなされている事実に驚くと同時にカレンジンという部族の存在、部族問題、ケニア国民生活におけるロードレースのポジションなど興味深いテーマを知った。欧米人がアフリカンに対して抱く「研究対象」としての目線も改めて見えたような気がする。大学でスポーツ科学を専門とする学部在籍した著者ならの理解力と、コミュニケーション能力を伴う語学力の高さによって、かなり難解な医科学、生理学の専門領域すら抵抗無く読み進められるのは見事である。従来のスポーツノンフィクションにはなかった新領域を開拓した作品と言える。

● 「吉田沙保里 ～119連勝の方程式～」

(新潮社)

布施 鋼治 (ふせ・こう

じ)

北京で女子レスリング55kg級五輪2連覇を達成した吉田沙保里の強さと、微笑を誘う性格、吉田を育てた家族や指導者たち、女子レスリング関係者の物語を丁寧に書き上げた作品である。ほのぼのとした温もりに包まれる、読後感のさわやかな秀作である。

本書は当初「不敗の方程式」という書名を予定していたが、まさかの1敗で変更された。内容もかなり修正を余儀なくされただろうが、かえって人間・吉田沙保里のダイナミズムや強さの不思議がむしろ鮮やかに描かれることにつながったのではないかと。08年7月の出版で、五輪直前のトレーニングで完結しており、2つめの五輪金メダルをカバーできなかったのは惜しいが、やむを得まい。著者の狙いはライフストーリーでも、復活ドラマでもなく、吉田沙保里という人間を理解し、伝えることにあったのだから。

レスリングの専門知識にも裏打ちされた文章は安心感があり、読みやすい。女子レスリングの五輪実施・発展を見通し、自腹を切って選手強化の先頭に立った福田富昭日本レスリング協会会長の奮闘ぶりも面白い。新鮮な分野を取り上げた好著といえよう。

● 「デッドマール・クラマー ～日本サッカー改革論～」

(ベースボール・マガジン社)

中条 一雄 (ちゅうじょう・かずお)

日本サッカーの改革者であり、救世主とも言われるドイツ人指導者デッドマール・クラマーの人となり、その指導論を、初来日からおよそ半世紀にわたって身近で取材してきた元朝日新聞記者中条一雄がまとめた。クラマーは今もドイツで健在ながらすでに齢83歳、著者の中条も一つ違いの82歳である。お互いに残された時間は少ない、書いておかねばならないことを書けるうちに、という思いが著者の本書執筆動機となったようである。

最近の著者とクラマーという二人の老人が熱く抱擁している写真がカバーの袖にあるような個人的な思い出の強さが遠慮なく打ち出されているにも関わらず、本書は仲間誉めの、ただの記念誌に随してはおらず、クラマー・コーチの仕事ぶりは、その背景や現実の成果と失敗も含めて、客観的に、説得力を持って紹介され、考察されている。そしてその対極に、メキシコ後(クラマー後)の日本サッカーの低迷ぶりへの鋭い批判が提起される。東京五輪後にクラマーが提起した日本サッカーへの提案(本書の末尾に収録されている)は、リーグ戦の実施など実現したこともあるが、その多くは未だに読むに値する現実性を持っている。逆に言えば、四半世紀経ってもクラマーのアイデアを生かし切れない日本サッカーへのもどかしい気持ちが本書執筆の動機の一つなのだろう。「日本サッカー改革論」という副題も宜なるかなと思われる。

80歳を優に過ぎたクラマーと著者が昔語り終始して現状を見ようとしなければ、それはいわゆる老害に過ぎない。終盤少しそれに近づく危険性を孕みながらも、この二人のやり取りには未来への希望が感じ取れる。熟年の読者に「老いていくこと」を明るく捉えさせてくれる点でも価値ある一書と言える。

以上